

地域で子育てを支える：こんにちは赤ちゃん訪問の役割と今後の課題

研究分担者 後藤 あや（福島県立医科大学総合科学教育研究センター）

研究協力者 新井 猛浩（山形大学地域教育文化学部）

研究要旨

「成育医療等の提供に関する施策の総合的な推進に関する基本的な方針」に基づく施策の実施状況に関する評価の指標には、「この地域で子育てをしたいと思うか」が指標として含まれている。本報告ではこんにちは赤ちゃん訪問の事業評価を毎年行っている自治体のデータを用いて、その訪問の対象者（乳児の親）の気持ちと、訪問者（こんにちは赤ちゃん応援隊）のやりがいについて分析を行った。本研究の結果より、訪問事業が親にとって周囲との関わりを持つ機会となり得ることが示唆された。応援隊側においても、多くの者が活動にやりがいを感じており、その背景には経験年数、保健師との連携、活動前のイメージ形成、活動後の交流機会などが関連していた。訪問活動をより充実させるには、応援隊同士の情報交換の場や保健師との継続的な連携体制の構築が必要である。

A. 研究目的

2021年2月に定められた「成育医療等の提供に関する施策の総合的な推進に関する基本的な方針」（成育医療等基本方針）に基づく施策の全体的な実施状況の評価指標として、「この地域で子育てをしたいと思う親の割合」が指標として取り上げられており、地域社会全体で子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくりを進めている。

その背景として育児中の母親の孤独感があり、10年以上前から注目されている。母親の孤独感が母親自身の抑うつや育児不安につながり、児童虐待をはじめとした子どもの生育環境の悪化の原因となることが懸念される。近年では父親の育児参加が奨励されてきているものの、我が国では依然として母親に育児の負担がかかる場合が多く、母親が育児をひとりで抱え込むような状況で周囲から孤立することのないような支援が求められている(1)。

母親の孤独感に関連する要因として周囲との関係性が上手く構築できない等の個人的特性と地域との関係や環境等の地域要因がある。特にソーシャルネットワークをうまく広げられずにいる母親へのソーシャルサポートを充実させていくことは孤独感を軽減させるような効果的な支援になるものと考えられる(2)。近年、孤独は社会的な課題としてその対策が重要視されている。一般的な孤独尺度が育児期の親にも用いられて、孤独と孤立との関係も明らかになっている(3)。対策としては社会的処方政策的に提示されており、母親が近隣との交流やつながりを持つこと、そして地域社会にいる支えてもらえる人々の存在を認識できるような支援が有益である(4)。

乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）は2009年より児童福祉法上に位置づけられ、市町村を実施主体として全国で実施されている。この事業の具体的な目的は、生後4か

月までの乳児のいるすべての家庭を訪問し、様々な不安や悩みを聞き、子育て支援に関する情報提供等を行うとともに、親子の心身の状況や養育環境等の把握と助言を行い、支援が必要な家庭に対しては適切なサービス提供につなげることである。この事業が乳児のいる家庭と地域社会をつなぐ最初の機会となり、乳児家庭の孤立化を防ぎ、乳児の健全な育成環境の確保を図る。

福島市のこんにちは赤ちゃん訪問事業では保健師と地域のボランティアが乳児訪問をそれぞれ1回行っており、毎年事業評価を行っている(5)。本報告では直近2年間の事業評価データを用いて、訪問を受けた対象者が学んだことを積極的に周囲に伝えたいという積極的なネットワークキングの意思と、訪問する赤ちゃん応援隊のやりがいについて分析し、本事業の向上について考察した。

B. 研究方法

1. こんにちは赤ちゃん訪問対象者

調査対象者に案内はがきを送付し、福島市オンライン申請にて回答を得た。調査の時期は2023年2-3月および2024年2月で、それぞれ2022年4月1日から7月31日までに生まれた児の508家庭と、2023年4月1日から7月31日までに生まれた児をもつ家庭を対象とした。調査は匿名で実施され、個人を特定できない形で市からデータの提供を受けた。

主な調査項目は、専門職の訪問を受けたか、赤ちゃん応援隊の訪問を受けたか、訪問時期の適切さ、地区の情報が得られたか、渡された資料が役立ったか、誰かと話すきっかけになったか、誰と話したか、および訪問を受けての気持ちである。

本分析では、訪問を受けて誰かと話すきっかけになったということと訪問を受けての気持ち

(必要な時に誰かに相談する気になれたか、訪問者に話をよく聞いてもらえたと思うか、不安が軽減したか、育児に対する自信を持つことができたか、応援隊に地域で声をかけられたら嬉しいか)の関連を検討した。誰と話すきっかけになったかは複数回答で、気持ちについての回答は「とてもそう思う」「そう思う」「どちらとも言えない」「そう思わない」「全くそう思わない」の5択であり、後者3つをまとめて3区分にした。分析にはSPSS version 28を用いた。

2. こんにちは赤ちゃん応援隊

調査の時期は2023年1-2月で、活動中の87人を対象とした。調査は匿名で実施され、個人が特定されない形で市からデータの提供を受けた。

主な調査項目は、活動年数、活動して良かった経験、訪問後に対象者と合う機会、活動中の経験、担当保健師との連携、活動への不安、活動はイメージ通りだったかである。それぞれの項目について、自由記載も求めた。

注目した変数は、応援隊のやりがいに関する変数として活動してよかった経験があるかどうかである。回答は「はい」、「いいえ」、「わからない」の3択であり、後者2つをまとめて、他の項目との関連を分析した。活動の不安は「1. 不安はない」から「5. とても不安」を、1-2の不安なしと3-5の不安ありに2区分した。分析にはSTATA version 18を用いた。

(倫理面への配慮)

分析に用いたデータは福島市が実施した無記名アンケートから作成されたものである。匿名データの二次利用であるため「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に該当せず、福島県立医科大学の倫理審査は不要であった。

C. 研究結果

1. こんにちは赤ちゃん訪問対象者

本事業の対象者計 957 人（2022 年 508 人、2023 年 449 人）中、計 349 人（2022 年 176 人、2023 年 173 人）から回答を得た（回答率 36.5%）。ただし、2022 年のデータ提供が後半 45 人分のみで、分析対象者数は計 218 人であった。専門職の訪問を受けた者が 93.6%、応援隊の訪問を受けた者が 86.2%であった。訪問の時期についてちょうどよかったと回答した者が 88.4%、早かったと回答した者が 11.1%、遅かったと回答した者が 0.5%だった。訪問を受けて誰かと話すきっかけになったと回答した者は 70.0%であった（表 1）。

訪問がきっかけになり夫と話したことがある者は 68.5%で、続いて実母とが 41.3%であった（表 2）。訪問を受けての気持ちはすべての項目で「とてもそう思う」が最も多く、必要な時に誰かに相談する気持ちになれたでは 42.9%、訪問者に話をよく聞いてもらえたでは 53.8%、不安が軽減したでは 41.4%、育児に対する自信を持つことができたでは 38.2%、一度来訪した赤ちゃん応援隊に地域で声をかけられたら嬉しいでは 52.8%だった。また、地域の情報が得られたと回答した者は 86.2%であった（表 3）。

訪問をきっかけに誰かと話すきっかけになった場合は有意に、訪問の時期が適切と感じており、渡された資料が役立っており、必要な時に誰かに相談する気持ちになれて、また、地区の情報も得られていた（全て $p<0.001$ ）（表 4）。気持ちについては、訪問者に話をよく聞いてもらえたと感じており、育児への不安が軽減し、自信を持つこともでき、さらに一度来訪した応援隊に街で声をかけられたら嬉しいと感じていた（全て $p<0.001$ ）。

2. こんにちは赤ちゃん応援隊

応援隊 87 人中 80 人から回答を回収した（回答率 92%）。10 年以上経験している者が 25.0%を占め、次いで 3-5 年が 22.5%であった。89.5%が活動してよかった経験があったと回答した（表 5）。

活動してよかった経験がある場合は有意に、経験年数が多く（ $p=0.03$ ）、訪問後に対象者に会う機会があり（ $p=0.01$ ）、担当保健師との連携があり（ $p=0.004$ ）、活動がイメージ通りで（ $p=0.01$ ）、活動に不安がなかった（ $p=0.01$ ）だった（表 6）。

D. 考察

1. こんにちは赤ちゃん訪問対象者

今回の結果は、乳児家庭全戸訪問事業が親のソーシャルネットワークを広げるきっかけになることを示している。専門職や応援隊などの訪問とそれをきっかけにした周囲の人との会話が親の気持ちに良い影響を及ぼし、育児への不安や孤独感が軽減するものと考えられる。周囲の人との関係性を構築することに何らかの困難がある場合にも、訪問者との顔が見える交流によって、近隣との付き合いの希薄さや地域のつながりを持ってないままで取り残されることを防ぐ一助となり得ると考える。訪問事業によって孤独感をはじめとした親のおかれた状況を把握するとともに、親が社会的支援を求められやすくなるような環境を整えることは今後ますます重要になる(2)。

2. こんにちは赤ちゃん応援隊

応援隊と親が合うことは、親のソーシャルネットワークの広がりだけでなく、応援隊のやりがいにも関連していた。応援隊のやりがいをさらに上げるためには、保健師との連携強化、活動開始前に活動のイメージをつけ、そして活動に対する不安への対応が必要である。

得られた結果から事業向上案として、以下が考えられる。第一に、経験年数の多い応援隊は

活動してよかった経験がある者が多く含まれており、活動を開始する前や経験の浅い応援隊にポジティブな経験を共有する機会を提供できる。京都府の自治体で行った子育て支援ボランティアの継続要因についての調査では、メンバーが地域において目的を共有する仲間との交流の機会を持つことにやりがいを感じていることが報告されている(6)。第二に、応援隊と保健師との話し合いの場をより多く設け、応援隊が不安に思う事例を検討する。乳児家庭全戸訪問事業に携わる主任児童委員を対象に行った質的研究から、保健師が地域のボランティアを子育て支援の大事なパートナーと捉え、必要に応じて訪問後の情報共有を行い、事例検討や活動の方向性を話し合うなど研修の在り方を検討する必要があると述べている(7)。

E. 結論

本研究の結果より、「こんにちは赤ちゃん」訪問事業が、乳児の親にとって周囲との関わりを持つ機会となり得ることが示唆された。訪問を受けた親の多くが、専門職や応援隊との対話を通じて誰かと話すきっかけを得たり、地域の情報に触れたりしており、育児に対する気持ちの変化や相談のきっかけにもつながっている可能性が伺えた。訪問時期の適切さや、資料の有用性、訪問者とのやりとりの内容も、こうした変化と関連していると考えられる。

また、応援隊側においても、多くの者が活動にやりがいを感じており、その背景には経験年数、保健師との連携、活動前のイメージ形成、活動後の交流機会などが関連していた。応援隊の支援活動をより充実させるには、応援隊同士の情報交換の場や保健師との継続的な連携体制の構築が必要である。

【参考文献】

1. 馬場千恵, 村山洋史, 田口敦子, 村嶋幸代. 乳児を持つ母親の孤独感と社会との関連について 家族や友達とのソーシャルネットワークとソーシャルサポート. 日本公衆衛生雑誌. 2013 ; 60 (12) : 727-737.
2. 佐藤美樹, 田高悦子, 有本梓. 都市部在住の乳幼児を持つ母親の孤独感に関連する要因 乳幼児の年齢集団別の検討. 日本公衆衛生雑誌. 2014 ; 61 (3) : 121-129.
3. Arimoto A. Tadaka E. Individual, family, and community factors related to loneliness in mothers raising children less than 3 years of age: a cross-sectional study. BMC Women's Health. 2021; 21: 226
4. Honda H. Kita T. Social prescription for isolated parenting in Japan: Socioeconomic characteristics of mothers with weak social connectivity in their community. Health Soc Care Community. 2022; 30: e1815-e1823.
5. 福島市. こんにちは赤ちゃん訪問のお知らせ . <https://www.city.fukushima.fukushima.jp/hoken-chiiki-hoken2/kosodate/ninshin/shussan/140515.html>
6. 田中富美子, 佐藤裕見子, 小石真子. 地域における子育て支援ボランティア活動の継続要因. 日本健康医学会雑誌. 2021; 30: 108-114.
7. 浅野綾子, 田中裕子. 乳児家庭全戸訪問事業に携わる主任児童委員が行う親子への支援. 日本赤十字看護学会誌. 2023; 24: 23-32.

F. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

G. 知的財産権の出願・登録状況

なし

表 1. 家庭訪問について

	n=218	%
専門職の訪問		
受けた	204	93.6
受けなかった	14	6.4
応援隊の訪問		
受けた	188	86.2
電話のみで受けなかった	23	10.6
受けなかった	7	3.2
訪問の時期について		
遅かった	1	0.5
ちょうどよかった	183	88.4
早かった	23	11.1
訪問を受けて、誰かと話すきっかけになったか		
はい	147	70.0
いいえ	63	30.0

表 2. 訪問がきっかけで子育てについて話した相手

		n=218	%
夫	あり	146	68.5
	なし	67	31.5
実母	あり	88	41.3
	なし	125	58.7
実父	あり	20	9.4
	なし	193	90.6
義母	あり	20	9.4
	なし	193	90.6
義父	あり	10	4.7
	なし	203	95.3
祖母	あり	3	1.4
	なし	210	98.6
祖父	あり	2	0.9
	なし	211	99.1
きょうだい	あり	19	8.9
	なし	194	91.1
友人	あり	38	17.8
	なし	175	82.2

表 3. 訪問を受けての気持ち

	全くそう 思わない		そう 思わない		どちらとも 言えない		そう思う		大変 そう思う	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
相談する気持ちになれた	2	0.9	5	2.4	32	15.1	82	38.7	91	42.9
訪問者に話をよく聞いて もらえた	2	0.9	7	3.3	25	11.8	64	30.2	114	53.8
不安が軽減した	4	1.9	8	3.8	49	23.3	62	29.5	87	41.4
育児に対する自信を持つ ことができた	5	2.4	12	5.7	56	26.4	58	27.4	81	38.2
一度来訪した赤ちゃん応 援隊に地域で声をかけら れたら嬉しい	6	2.8	7	3.3	18	8.5	69	32.5	112	52.8
地区の情報が得られた	2	1.0	5	2.4	22	10.5	94	44.8	87	41.4

表 4. 誰かと話すきっかけになったとの関連要因

	誰かと話すきっかけになった				p 値
	はい n=147	%	いいえ n=63	%	
訪問の時期について					
遅かった	0	0.0	1	100.0	<0.001
ちょうどよかった	134	74.0	47	26.0	
早かった	9	39.1	14	60.9	
渡された資料は役立った					
そう思わない・どちらとも言えない	8	21.1	30	78.9	<0.001
そう思う	60	71.4	24	28.6	
とてもそう思う	77	90.6	8	9.4	
相談する気持ちになった					
そう思わない・どちらとも言えない	13	34.2	25	65.8	<0.001
そう思う	56	68.3	26	31.7	
とてもそう思う	78	86.7	12	13.3	
訪問者に話をよく聞いてもらえた					
そう思わない・どちらとも言えない	15	45.5	18	54.5	<0.001
そう思う	37	57.8	27	42.2	
とてもそう思う	95	84.1	18	15.9	
不安が軽減した					
そう思わない・どちらとも言えない	24	40.0	36	60.0	<0.001
そう思う	46	74.2	16	25.8	
とてもそう思う	75	87.2	11	12.8	
育児に対する自信を持つことができた					
そう思わない・どちらとも言えない	33	45.8	39	54.2	<0.001
そう思う	42	72.4	16	27.6	
とてもそう思う	72	90.0	8	10.0	
担当応援隊に声をかけられたら嬉しい					
そう思わない・どちらとも言えない	8	33.3	16	66.7	<0.001
そう思う	41	64.1	23	35.9	
とてもそう思う	80	81.6	18	18.4	
地区の情報が得られた					
そう思わない・どちらとも言えない	11	37.9	18	62.1	<0.001
そう思う	61	64.9	33	35.1	
とてもそう思う	73	85.9	12	14.1	

一部項目では欠損のために 100%が表頭の合計数と異なる。

カイ 2 乗検定を用いた。

表 5. 応援隊と活動の特徴

	合計 (n=80)	
	n	%
経験年数		
1年未満	16	20.5
1-2年	10	12.9
3-5年	18	23.1
6-9年	14	18.0
10年以上	20	25.6
活動してよかった経験		
あり	68	89.5
なし・わからない	8	10.5
訪問後に対象者に会う機会		
あり	47	58.8
なし	33	41.3
訪問で赤ちゃんに会えなかった		
あり	55	68.8
なし	25	31.3
電話がつながらず対応できなかった		
あり	44	55.0
なし	36	45.0
コロナを理由に断られた		
あり	19	23.8
なし	61	76.3
専門職訪問との違いを聞かれて困った		
あり	12	15.0
なし	68	85.0
離乳食の相談で困った		
あり	17	21.3
なし	63	78.8
担当保健師との連携		
あり	70	89.7
なし・わからない	8	10.3
活動はイメージ通りだった		
はい	36	50.0
いいえ	36	50.0
活動の不安		
あり	25	33.8
なし	49	66.2

一部項目では欠損のために 100%が表頭の合計数と異なる。

表 6. 応援隊の活動をして良かった経験の有無と関連要因

	経験あり (n=68)		経験なし・ わからない (n=8)		p値
	n	%	n	%	
経験年数					0.03
1年未満	12	80.0	3	20.0	
1-2年	8	80.0	2	20.0	
3-5年	14	87.5	3	12.5	
6-9年	13	92.9	1	7.1	
10年以上	20	100.0	0	0	
訪問後に対象者に合う機会					0.01
あり	42	97.7	1	2.3	
なし	26	78.8	7	21.2	
訪問で赤ちゃんに合えなかった					0.17
あり	50	92.6	4	7.4	
なし	18	81.8	4	18.2	
電話がつながらず対応できなかった					0.29
あり	39	92.9	3	7.1	
なし	29	85.3	5	14.7	
コロナを理由に断られた					1.00
あり	17	89.5	2	10.5	
なし	51	89.5	6	10.5	
専門職訪問との違いを聞かれて困った					0.87
あり	10	90.9	1	9.1	
なし	58	89.2	7	10.8	
離乳食の相談で困った					0.48
あり	16	94.1	1	5.9	
なし	52	88.1	7	11.9	
担当保健師との連携					0.004
あり	62	93.9	4	6.1	
いいえ・わからない	5	37.5	3	62.5	
活動はイメージ通りだった					0.01
はい	33	100.0	0	0.00	
いいえ	29	80.6	7	19.4	
活動の不安					0.01
あり	18	78.3	5	21.7	
なし	46	97.9	1	2.1	

経験年数にはコクランアミテージ検定、その他の項目にはカイ 2 乗検定を用いた。